

地産地消の活動 20 周年／「仕事」として若い世代へ

谷口吉光（秋田県立大学）

私事になるが、私が代表を務める地産地消を進める会が設立 20 周年を迎えた。去る 4 月 16 日に秋田市のエリアなかいちで関係者による祝賀会を開き、また地元の無明舎出版から『地域の食』を守り育てる」という題名の本を出版した。

今でこそ「地産地消」という言葉は普通の言葉になったが、20 年前は世の中でまったく使われておらず、辞書にも載っていなかった。「チサンチショウってどう書くんですか」と聞かれて、「チサンのチは地域の地」と一文字ずつ説明しなければならなかった当時の苦勞が夢のように思い出される。

私たちの会がずっと訴えてきたのは「秋田にはすばらしい食文化がある。それを大事に守り育てていこう」ということと、「日本には食を通じて人と人を結びつける文化がある。その力を活かして人と人をつなぐ場をたくさん作ろう」ということだ。

具体的には、農家のお母さんから郷土料理の作り方を教わる「地産地消の料理教室」、若者に秋田の地酒のおいしさを知ってもらう「秋田の日本酒を地産地消でおいしくいただく会」、県内の有機農家が一堂に集まって消費者と交流する「オーガニックフェスタ in 秋田」、地元食材にこだわる「地域の食のレストラン」のネットワークづくり、地元の羊毛から糸を紡いでセーターなどを作る「衣の地産地消 羊の学校」などの活動を行ってきた。いずれも「秋田発」と呼べる独創的な内容で、全国に誇れるものだと自負している。一緒に活動してくれた会員の方々には感謝の言葉しかない。

しかし、いつのまにか私たちも年を取り、自分たちの引き際とその後の運動をどうするかを考えなければならない年齢になった。一般に市民運動というものは言い出した人間が勝手に進めていくものだから、若い世代に引き継ぐのはとても難しい。創業世代が高齢化して活動が停滞し、開店休業状態になっていく例が大半ではないだろうか。

そこで私たちは、活動を通じて自分たちが蓄積したスキルや人脈などを「お金を稼げる仕事」の形で若い人に渡してやれば、地産地消で生きていきたい若い世代が引き継いでくれるのではないだろうかと考えた。

非営利の市民運動とはいっても、年間数百万円から数千万円の事業を成功裏にやり遂げるには膨大な数の知識やスキルを身につける必要がある。それを若い人に仕事として、上手に引き渡せれば、「受け継ぎたい」という人が出てくるのではないか。

そう考えて男鹿南秋から能代山本地域で活動している若い人たちに呼びかけて、地産地消の運動を継承する取り組みを始めた。本欄で紹介した「男鹿・ローカルビジネス・デザインスクール」はその一環である。

こうして私たちは、地産地消を手がかりに地域に広げてきた「横糸」を、次世代につなぐ「縦糸」に織り合わせる仕事を始めた。詳しいことは前述の本にまとめたのでぜひ読んで下さい。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2017 年 5 月 14 日掲載分に加筆・修正した）